ポータブル蓄音器HMV＃102、 歴史について

年代	機器等	世界	日本
1928 昭和3年	電磁型サウンドボックス開発	ラジオ 放送 1927 年（昭和2年） 朝鮮 1928 年 京城（現・ソウル）、台湾でも開始。 1933 年 台北、満州（現・中国東北部）では新京（現・長春）も開局。	1928 年 3 月 日本コロムビアが電気吹き込み第 1 号レコードとして藤原義江の「この 道」や「叱られて」他を発表。（**C**:P174） 6 月 雑誌：名曲（現在のレコード音楽）が発行される。 洋楽レコードの国産化があったために次々とレコード雑誌発行へ。（C:P86～） 1927 年以降、国外でもラジオ放送開始。
1930 昭和5年 ～ 1945 昭和 20 年	電気蓄音器新作 誕生（電蓄） ※「SP から LP へ」と「LP から CD へ」の変化と「蓄音器から電気蓄音器へ」の変化の違い→ 「SP」 電気蓄音器が登場しても蓄音器はそのまま利用でき、「電気蓄音器」は LP が SPを、CDが LPを駆逐したように蓄音器（蓄音器）を駆逐することはなく、共存できた。 理由：蓄音器（手回し）は値段が電蓄よりずっと安く、大都会にしかレコードや蓄音器の専門店がなかったことなどが理由と考えられている。（**C**:203） 戦時中は SP の原料シェラックの輸入がとだえ、音質が悪化した。それから、プレス数がわずかにまで減少した。	レコード・蓄音機 1931 年 9 月 アメリカ 米ビクター 33 回転の長時間レコード発売（**C**:107） ※従来の SP と異なり、新たに機器が必要で普及せず。（**C**:117） 12 月 EMI 発足（HMV（英グラモフォン）と英コロムビアが合併）合併したものの、それぞれ独立したレーベル。 ※日本は、HMV は日本ビクター、英コロムビアは日本コロムビアのままであった。（**C**:120）また、英デッカ（1929 年創設）が RCA や EMI と並ぶ第三勢力に急成長を遂げた（安い価格と音のよさがウケた）。（**C**:120） 1932 年 6 月 アメリカ 米コロムビア 28 回転レコード発売 1936年 アメリカ ジュークボックスが人気を得る。	ラジオ 放送 1931 年（昭和6年） 1 局が２波を出す二重放送も始まる。 蓄音器 1931 年 7 月 日蓄 商標をコロンビアに統一 9 月 日本ビクター 国産蓄音機製造開始（C:107） 12 月 蓄音機普及 エレクトラも国産化 1932 年のロサンゼルス五輪でラジオ人気に拍車がかかる。（36 都市で放送） 6月7、8日名古屋中央放送局で「ブッポウソウ」の生態放送に成功。鳳来寺山から地方局の存在感を全国に示した。 1934 年 昭和 9 年 5 月 著作権法改正により、放送でのレコードの自由使用が正式に認められた。※大正 14 年から始まったラジオ放送により、レコードの売り上げが減るのではと考えられていたが、その逆で売り上げが増加した。この著作権改正により、放送でのレコードの使用の問題に決着がついた（昭和 7 年の古賀メロディの海賊版や府立学校（現：首都大学東京）のドイツ人法学博士ヴィルヘルム・プラーゲによる放送使用料金問題（プラーゲ旋風））（C:111、112） 1934 年 ハイファイ（Hi-Fi）という言葉が蓄音器、レコードの広告に使用されるようにな

			る。 1938 年　2 代豊橋市立図書館が西八町に完成した。 1941 年 レコード原盤の輸入途絶える。1943 年には新譜の販売がほとんどなくなる。 日本録音や手持ちの原盤を組み替えた再販売のものが細々と出ていただけであった。また、レコードの質が悪化していた。さらに、レコードという言葉の使用がダメで、「音盤」というようになり、蓄音器レコード文化協会も日本蓄音器音盤文化協会と改名。 ※シェラック（SP の原料）1937 年、1938 年ごろから不足し始めた。また、1938 年には蓄音器と針への鋼鉄使用が禁じられていた。（C:306） このような状況であったためアメリカ・イギリスとフランス（最新版）の作品（主にジャズや英米のヒット曲）は禁止だったが、もともと日本国民が聞いていたクラシック音楽はドイツの作品であったので、影響は少なかったとのこと。（C:312）
1945 年 昭和 20 年	1947 年 米 3M 社から磁気テープ（紙及びアセテート・ベース）販売 米アンペックス社からテープレコーダー販売（モデル２OO）1949 年には 300 型を販売。 1948 年　アメリカ ６月　　米コロムビア 　　LP レコード発表 ８月　　LP レコード発売 1949 年　アメリカ米 RCA　EPレコード発表 1950 年	1945 年 9 月　アメリカでシカゴをはじめ 48 局の FM 放送業務開始（E:277） 1951 年　アメリカを中心にマイナーレーベル誕生。輸入版が日本に伝わる（SP、LP など）。これをもとに日本でも国産化されていく（最初は 1954 年 9 月のレーベル：ウエストミンスター）。（D:218～） ※ウエストミンスターレコードは 1949 年にニューヨークで設立され、他社の手がけていない分野「室内楽」で大きな成功を収めた（D:224）	1945 年　8 月 15 日正午 玉音放送：玉音＝天皇が国民向けに肉声を発すること。 戦争終結を混乱無く知らせるには天皇の玉音が一番ということであったため。しかし、反対派も多く、反対派との攻防戦が繰り広げられた。（F:P36～） 10 月　日蓄工業（現・日本コロムビア）は SP レコードとポータブル蓄音器の生産を再開（敗戦から 2 ヶ月あまり生産していなかった）。 12 月にはレコード小売業者が 4000 軒から 500 軒にまで減少。 ※戦争中も苦しい生活であったが、戦後も生活面では、物資が不足し毎日餓死者が出ていたが、軍国主義が無くなり。娯楽への欲求が強い次代であった。（D:20, 21） 1946 年から大阪電気音響（現オンキョー）、東京通信工業（現ソニー）、春日無線電気商会（トリオ→現ケンウッド）、1948 年に片岡電気（現アルプス電気）、福洋電気（現コーラル）1949 年に信濃音響研究所（フォスター）などオーディオメーカー・電気産業関連の会社が続々と設立する。 1946 年　1 月　クラシック洋盤販売再開 1948 年　11 月　日本コロムビアが米コロムビア原盤の新録音新譜を販売。（D:12）

	日本では NHK によるテレビの定時放送が実験的に始まる（1953 年に本放送開始）。 1951 年 4 月　日本コロムビアが LP を発売。 1953 年 日本ビクターも LP を発売。 東京電機化学工業（TDK）　磁気テープ発売（D:283） 1954 年　2 月　日本コロムビア EP 発売（D：111） 1958 年 ステレオ LP が販売される（モノラル LP は SP とステレオ LP の間に発売があった）。（D：294）		レコード生産量 1000 万枚を突破。1946（昭和 21）年の映画『そよかぜ』の中で**<u>並木路子が歌った「りんごの唄」</u>**1947 年末までに 12 万５千枚売り上げた（各地でﾚｺｰﾄﾞｺﾝｻｰﾄが開かれていた）。（D：20, 21） 1953 年 8 月 10 日　LP 販売　純国産邦楽 LP 販売 ・「石松三十石道中」（広沢虎造） ・「越後獅子」、「浅妻船」（芳村伊十郎）（D：110） あとをおって、1953 年に 9 月に日本ビクターも LP 販売。１２月末にはキングレコード（D:155 前後参照）も LP 販売。日本ポリドール、ウエストミンスターや新世界などの新しいレーベルが登場。 この時期から LP への移行が始まった。（神武景気の時期と重なり、戦後経済も復興しつつあった。）※当初、LP の価格が高かったために SP と EP の売り上げがよく、LP への移行が遅れていた。（D：137）LP の価格は 1957,8 年にようやく下がっていった。 1955 年 ９月　エンジェルレコードを発売。このエンジェルマークは 1898 年に英グラモフォン創立時から使用されていた最も古いレーベルマーク（D：202）。 1960 年に SP と LP の生産枚数が逆転する。（D：30～）

Q：録音を何故吹き込みというか？

A：メガホン型のホーンに向かって大声をあげて行われていた。初期の頃、歌手が無伴奏でメガホンの中にあたかもふきこんでいるように見えたので、日本では録音のことを「吹き込み」というようになった。（B：P90）